

## 本論文の内容の要旨

「在宅高齢者の自己実現尺度の開発の研究」

—自己実現尺度開発と自己実現概念の操作的定義—

Development of the Self-Actualization Scale  
for the Elderly Living at Home

ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科  
社会福祉学専攻博士後期課程 清重哲男

本論文のテーマに自己実現を取り上げた理由は、高齢者の福祉サービスを評価する概念として、自己実現の概念を活用する必要性があるという理由からである。

本論文は、在宅高齢者を対象とした「自己実現尺度」を開発することを目的とした研究論文である。先行研究から自己実現の概念の仮説を立て、仮説に基づき仮尺度を構築し、社会調査を行った実証研究論文である。社会調査で得られたデータの信頼性分析、因子分析及び分散分析の解析から、17項目より構成される自己実現尺度を作成した。作成した自己実現尺度を共分散構造分析（Covariance Structural Analysis）にかけ、2次因子構造を検証し、モデルとの適合性が十分であることを確認し、「自己実現尺度（SAT-17）」が開発された。自己実現尺度の信頼性、妥当性は十分満足できる内容であることを確認した。開発した「自己実現尺度（SAT-17）」の因子構造から、操作的に自己実現概念を定義した。

今後、交差妥当性などの残された課題が十分検討されれば、本尺度を高齢者福祉サービスの効果測定の道具として十分活用することができる。

第1章では、自己実現の程度を測定するスケールを開発する第一歩としてカント、ニーチェ、マズロー、マックス・シェーラーの4人の思想家の著述の中から自己実現の基礎概念に適用できる理念を抽出した。

これらの抽出した理念にデンマークでの自己実現先行調査から得られた自己実現生活の実例など、また高齢者施設での実務経験の中から得られた思想を取り入れ、本論文で筆者が論じようとする在宅高齢者の自己実現の概念を「**自己実現とは、日々の生活の中で、自己の新しい人間の創造を目標とし、他者の協力を得な**

がら潜在能力を生かし、自己を成長させ、自由に生き生きと意欲的に生きている状態をいい、そのことを通じ他者の幸福に貢献していること」と定義した。この概念は筆者が先行研究から経験的に定義した概念である。

次に、第1章で論じたカント、ニーチェ、マズロー、シェーラーの4人の思想家の先行研究、並びに第2章で論じたサクセスフル・エイジング、QOL、生きがい、自己決定の各先行研究及び、デンマークの現地調査及び、高齢者施設での筆者自身の勤務経験から、自己実現に関連するキーワードを451個抽出した。これらのキーワードを元に、自己実現質問文を作成し、老人クラブの3人の高齢者及びデイサービスセンターの利用者12人、社会福祉の専門家に依頼し事前ワーディング検討会を4回実施した。1項目ごとに慎重に吟味し、内容が重複した質問、答えにくい質問、わかりにくい質問文などの質問項目の改善を行い、最終的にプリテストに使用可能な仮尺度50質問項目を選定した。

質問文の回答方式は、5点式リッカートスケールとした。プリテストでは自記式質問票をC市在住の無作為に抽出した65歳以上の高齢者110人に郵送し、42の有効回答を回収した。

プリテストで得られたデータの項目削減と質問項目の最終表現の確定のため、新たに筆者を加えた3人の福祉系大学教員の4人のチームによる2回のワーディング検討会を実施した。質問文の用語の表現を精査し、また度数分布の片寄り、欠損値の有無を項目ごとに審査した。その後、信頼性分析、因子分析を繰り返し実施し、本調査用24尺度項目を選定した。

本調査は、自記式質問票をC市在住で無作為に抽出した65歳以上の高齢者1,120人に郵送し実施した。有効回収数413(36.8%)を得た。本調査の自記式質問票は、自己実現項目24、基本属性項目16の合計40質問項目から構成されている。

本調査で得られたデータから、全項目が度数が正規分布とみなしてよいこと確認した上で、信頼性分析によるIT関連、探索的因子分析による遊離因子の確認、潜在因子への命名の容易さなどについて繰り返し審査し項目削減を進めた。最終的に、自己実現尺度として17項目を選択した。こうして自己実現尺度(**SAT-17**)を開発した。自己実現尺度(**SAT-17**)の全ステートメントを次に示した。

表 5 - 1 0 自己実現尺度 (SAT-17)

観測変数名	自己実現尺度 17 項目のステートメント
01	現在、どの程度趣味に取り組んでいますか
02	同年輩の人と比べて、あなたは、現在、健康だと思えますか
03	世の中のために、役立つことをしたいですか
04	毎日の生活の中で楽しいことがありますか
05	人との出会いは、楽しいと思えますか
06	最近、お知り合いと一緒に過す時がありましたか
07	人が困っている時に、何かお手伝いをしていますか
08	あなたは、ご自分の、幸福な生活を希望しますか
09	ご自分の能力を生かした生活をしていますか
10	人より優れた能力が何かあると思えますか
11	日常生活で、自分のしたいことが自由にできますか
12	あなたは、生きていることに大切な意味があると思えますか
13	ご自分の可能性を、これから伸ばしたいと思えますか
14	日常生活上の問題をご自分で処理できますか
15	ご自分の意志を家族や周囲の人に伝えて入ますか
16	ご自分の将来の生活に、何か希望を持っていますか
17	ご自分のやりたいことをどの程度、実現できると思えますか

仮説に基づく 2 つの上位概念及び探索的因子分析より抽出した 5 つの下位概念から構成される自己実現尺度の因子構造の検証のため、確認的因子分析を行い、3 つの適合度指標 CFI、TLI、RMSEA を用い評価した。CFI は 0.938 と十分高く、TLI も 0.926 と十分高い値であった。ともに十分な適合を示す満足の数値であった。モデルとデータの乖離を示す指標の RMSEA は 0.065 であり (RMSEA の許容範囲は 0.08 以下)、分析値はほぼ十分な適合を示す結果であった。

信頼性の確認は、17 尺度項目の信頼性分析の結果、クロンバックの  $\alpha$  係数が 0.9247 (N = 386) であり、統計学的に十分に高い信頼性であることが確認された。

この尺度の妥当性については、プリテスト前の段階で 4 回のワーディング検討会を実施し、さらに、本調査前には福祉の専門家 4 人のチームでの 2 回のワーディング検討会を実施し、詳細に精査していることから、表面的妥当性は十分確認されたといえる。

確認的因子分析により検証された 2 次因子モデルの 2 つの上位概念と 5 つの下位概念から構成され因子構造より、自己実現概念を、『**自己実現とは「個人の生活」と「他者との関係性」の 2 つの上位概念から構成される。上位概念の「個人の生活」は「希望を実現する意欲」と「主観的健康度」及び「自分の人生を大切に考える」の 3 つの下位概念から構成される。もう 1 つの上位概念の「他者との関係性」は「能力の社会的活**

**用意欲と活用度」と「毎日の生活を楽しんでいる程度」の2つの下位概念から構成される。』と操作的に定義した。**

分析結果を考察すると、ステップワイズによる分散共分散分析により、「自己実現トータルスコア」の高い高齢者は「判断力」の機能が高く、「電話やメール」の回数と収入が同じであれば「同居人数」の数は、独立的に「自己実現トータルスコア」を高めることが確認された。つまり、「電話やメールの回数」と「同居人数」はともに「他者との関係」を示す指標であるといえることから、上位概念の1つである「他者との関係」の頻度の多さは、「自己実現トータルスコア」を高める重要な要因であるといえる。

また、「自己実現トータルスコア」を従属変数とし、「最終学歴」を最初の独立変数とし、「男」「女」を別にした場合、男女それぞれの「最終学歴」の高さは、「自己実現トータルスコア」に統計的に有意な影響を及ぼすことが明らかとなった。

本研究の自己実現トータルスコアの平均値は、44.3点であり、最高点は65点であった。本自己実現尺度を用いることにより、一人ひとりの自己実現トータルスコアを測定することができる。

今後の課題は、本研究で得られた自己実現尺度（SAT-17）を、地方小都市や農村部などの地域で継続調査を行い、地域的な交差妥当性を検証することである。

積み残した大きな課題は、PGCモラールスケールや人生満足度尺度などとの比較検討であり、今後これらの尺度との相関の程度や各種の独立変数との関連性の相違を調べ、自己実現尺度（SAT-17）の固有の性質を明らかにすることである。こうした課題を検討し、完成度の高い自己実現スケールが確認されれば、各種福祉サービスの効果測定のための尺度として活用することができる。

高齢社会では、高齢者が可能な限り、心身の健康のレベルを高く保ち、自立した生活を続けることが期待されている。現在までに、高齢者自身の身体的健康を増進するサービス評価については、有効な方式がほぼ確立しているが、自己実現などの精神の活動レベルを含めた維持、増進のためのサービス評価の有効な方法は明確になっていない。自己実現尺度が尺度として完成し、精神の活動レベルの評価道具として機能するよう期待されている。